山梨医科学雑誌（旧山梨医科大学雑誌）YMJの過去20年間を振り返って

山梨大学大学院医学工学総合研究部解剖学第1教室　大野伸一

私が，1992年5月に旧山梨医科大学に着任したときには，旧山梨医科大学雑誌（Yamanashi Medical Journal, YMJ）は，すでに第7巻が発刊されていた。その時の編集委員は，木下俊彦（産婦人科），佐藤章夫（保健学I），田坂捷雄（寄生虫学・免疫学），劔邦夫（生化学2），元村成（薬理学）5名の先生方であった。この年には，着任早々なのに総説原稿（YMJ7（3），109-121，1992）を依頼されて，書いた覚えがある。その後に，元村先生が弘前大学に栄転されて，その後任に永井正則先生（生理学1）が加わられた。この5名体制で，年間4巻のYMJを定期刊行していたのであった。当時の掲載内容は，総説（Review），原著（Original article），症例報告（Case report），その他各研究集会，セミナー，会議記録等であった。1995年には，松本由朗先生（外科学1）がさらに編集委員として加われ，総勢6名体制となった。その後に，1996年には劔先生，永井先生，松本先生が残られ，木戸啓先生（法医学），伊藤正彦先生（微生物学）と三俣昌子先生（病理学1）が，新たに加わられた。その年の11巻3号から，伊藤先生に代わり，私（大野）が編集委員となった。当時は，劔先生が編集委員長として御苦労されていたことを思い出します。編集方針としては，編集委員各自が年間4回の発刊を各号毎に分担していた。したがって，各編集担当者の責任において，定期刊行を遂行しなくてはならなかったわけであった。翌年の1997年12巻2号になり，永井先生が尾崎由基男先生（臨床検査医学）に代わられた。この号は，私が担当していたために，長文の編集後記を書いてしまった。その本文の抜粋は次のようである。「さて，この編集後記を書いております私は，昨年からYMJの編集に加わっており，まだまだ未熟な編集委員であります。前任地の信州大学医学部でも，信州医学雑誌の編集委員を10年ほど続け，その間に2度編集委員長を務めたことがありました。そこでの編集システムになれていた私には，YMJの編集委員会構成，投稿原稿依頼，雑誌編集方針等は，考えていたものとは大変違っておりました。多少の戸惑いはありましたが，このシステムになれることにいたしました。しかし，ここに私見を二つ述べさせていただきます。まず第一には編集委員の数を現在の3倍ぐらい（約15名）にして，研究熱心な講師，助手クラスを10名ほど加えることが必要と思います。YMJがSchool Journalとして価値を高めるためには斬新なアイデアが必要ですし，さらに質を高く維持していくには若手教官のエネルギーが必要です。また，雑誌編集にかかわることは，普段論文を投稿した場合に行なわれている一連の流れを知ることになります。第二には，単著の学位論文を積極的に掲載するといった学内の雰囲気作りをする必要があります。大学を卒業したての若い研究者が，最初の論文（和文，欧文どちらでも）をYMJに自分の力で掲載できたことを誇りに出来るような。ノイエスのある“良い論文”は，どこに掲載しても良いものなのです。何も掲載雑誌の“格づけ”にこだわる必要はありません。本当の価値を判断されなければならないのは，その論文自体であり，掲載雑誌ではありません。自信を持ってYMJに投稿してください」。すでに

約10年ほど前に述べましたことが，今でも正論と思っております。その後1998年13巻1号から，私が編集委員長としてYMJを発刊することになりました。当時の編集委員は，上記の方針にしたがいまして16名に増員されました。その御名前は，大野伸一，木戸啓，劔邦夫，三俣昌子，三枝岳志，杉山篤，金子誉，松本由朗，尾崎由基男，多和田眞人，小森貞嘉，浜田良機，小松秀樹，手塚英夫，飯島純夫，坪井良子の各先生方でありました。その後，現在まで約15～20名の編集委員体制がYMJ を支えている。この間の2003年18巻1号からは，山梨大学統合により，雑誌名が「山梨医科大学雑誌」から「山梨医科学雑誌」と変更になった。さらに2005年20巻1号からは，編集委員長が加藤良平先生（人体病理学）になり，年4回のYMJ定期刊行が順調に行なわれている。以上のように，山梨医科学雑誌は過去20年間の歴史を踏まえ，これからも新たな飛躍が期待されている。